

牧師室から(2021.9.12)

10 日前に、コロナワクチンの 2 回目の接種を終えた。1 回目は注射を打った腕の痛みが何日か続いただけで、注射後の体の異常は感じなかったが、今度は微熱と頭の重さ、全身の辛さがあり、夜中に目が覚めた。何とか我慢しようとしても眠れない夜になりそうので、用意して置いた解熱鎮痛剤を一錠飲んだ。不思議にすぐ楽になり、ぐっすり眠れた。次の日は良くなったと思っていたが、午後になって同じような症状が出て、薬嫌いな私だが痛みが怖くなってまた薬を一錠飲んだ。2 日目以後は落ち着いたようで、普段通りになっている。元気満々の鈴木牧師も私ほどではなかったが、似た症状があったようで、あっちが痛い、こっちが痛い、とお互いに言いながら過ごしていた。

ふと思った。お一人で暮らしている方々は、このような痛みを一人で耐えておられたな、と。

ある面、これは治るもので病気でもないが、持病や心の辛さ、また苦しい問題に直面した時に、一人暮らしをしている方々の痛みを改めて思わされた。

母は、なかなか結婚をしようしない私のことが気になって「年取って、体が弱くなると一人暮らしは辛いものよ」としばしば言っていた。もちろん、結婚で必ず一緒に生きる生活が保証されるわけでもなく、そのための結婚というもおかしい話である。かえって結婚をしないことや、一人暮らしが恵まれた生活になることもあるので、私の母の話は自己中心の娘を思いやる笑い話に過ぎない。しかし、心身が弱い時に、その痛みを訴え、愚痴でも言える人がそばにいることはいかに幸いなことか、それを母は言いたかったのかも知れない。

父が先に召天し、長年一人暮らしをしている母のことも思い浮かべながら、お一人で暮らす方々に、主の特別な御支えと助けがあることを心から祈っている。

(鈴木善姫牧師)